

創世記 19 : 15～29

ルカによる福音書 17 : 26～37

「命を保つ」

<神の国>

17章20節以下は、イエスさまが「神の国」、つまり「神のご支配」について教えておられるところです。

「神の国」。それは既に、わたしたちの間に、実現しているものです。神の御子イエスさまが、わたしたちのこの世に、わたしたち人間の罪と死の現実の只中に、来て下さった。そこにおいて、神のご支配は実現し始めました。

そしてイエスさまは、十字架の苦しみと死によって、わたしたち人間のすべての罪と滅びの死を担われました。そのご自分の苦しみを通して、わたしたちを罪と死から解放して下さいました。神さまの命のご支配へと招いて下さった。ここに、確かに実現した神の国があります。

この、神の御子、救い主イエスさまを信じ、この方と共に生きること。それが、わたしたちが神のご支配の中にあるということです。今まさにわたしたちは、既にイエスさまにおいて実現した神の国、神のご支配の中を生きているのです。

しかし、この世には未だ、その神の国を無視して受け入れない者や、まだ知らされていない者がいます。まだ、世界のすべての人に、神の国は明らかにされてはいないのです。そのゆえに、イエスさまに従う者は、この世において苦しめられたり、迫害を受けることもあります。そういう意味において、神の国は実現しているけれども、未だ、完成に向かって途中である、と言えるのです。

しかし、わたしたちは、苦しみの現実の中にあっても、既に、確かにこの世に来られて、十字架に架かって死に、そして復活された、イエスさまの確かなご支配を見つめて歩むようにと励まされています。どんな苦しみ、悲しみ、困難の只中にあっても、そのわたしたちのすべてをご存じでいて下さり、それをご自分の背中にすべて担って下さった方が、共にいて下さるからです。目の前の現実以上に、確かで力強い、神のご支配の中に生かされている。わたしたちはそのことを見つめて、今の時を大切に歩むべきなのです。

やがて終わりの日、イエスさまは再び来られて、神の国を完成させて下さいます。世界中に、すべての人の目に、稲妻が大空の端から端へと輝くように、はっきりと神さまのご支配が明らかにされるのです。わたしたちは、十字架と復活のイエスさまが共におられることを確信するゆえに、イエスさまが神の国を完成させて下さることも、まったく確かなこととして、希望を持って歩みます。

イエスさまは、そのようにご自分が再び来られ、神の国を完成させる日のことを、17章においては「人の子の日」、または「人の子が現れるとき」と呼んでおられます。

さて、今日の聖書箇所は、この神の国の教えの続きで、この「人の子の日」、イエスさまが再び来られて、神の国を完成させて下さるときまで、弟子たち、つまりわたしたちが、どのように生きればよいか。どのように備えていけばよいか。そのことが語られているのです。

その日がいつ来るのかは、誰にも分かりません。ですから、それはルカによる福音書12章でも、このように語られていました。出かけた主人がいつ帰ってきても良いように、僕は目を覚ましていなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。イエスさまは弟子たちにそのように教えて下さっていました。

根本的に、語られていることは同じです。終わりの日、イエスさまが来られる日を、目を覚まして待っていること。それを今回は、旧約聖書の出来事から、具体的に教えられているのです。

#### <ノアとロト>

さて、今日読まれたところの一つ目の区切りは、26～30節までです。ここには、ノアの物語と、ロトの物語が並行して語られています。どちらも創世記で語られている物語です。

まず、ノアですが、これは創世記6～9章に出て来ます。地上に人の悪が増し、神さまは墮落した人々を、洪水によって滅ぼそうとなさいました。しかし、神さまに従っていたノアには箱舟を作らせ、洪水から生き延びさせられた、という物語です。

今日の聖書箇所で強調されていることは、ノアが備えをしていた時に、「人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた」ということです。つまり、神さまの裁きの日が近づいており、ノアは神さまの御言葉に従って備えをしていたのに、人々はそれを横目で見ながら無視していた。大きな箱舟を作るノアをバカにし、嘲ったかも知れません。そして、いつも通り、目の前の日常生活に没頭していた。人々は、神さまを見つめる生き方をまったくしていなかったのです。そして、洪水がやってきた。

ノアの時代にあったようなことが、人の子が現れるときにも起こる。そう言われています。

ロトの物語も同じです。これは今日読まれました創世記19章にあります。ソドムという罪深い町を神さまが滅ぼそうとなさって、二人の御使いを遣わされました。この御使いに町の人々が乱暴しようとするところを、ロトは自分の家に招いて守ろうとします。それで、ロトは町が滅ぼされることを知らされ、逃げるようにと言われるのです。

ロトの嫁いだ娘の婿たちは、ロトの言うことを信じないで、笑って済ませました。滅びの時が来ると知らされているにも関わらず、彼らもまた、今日のところに「人々は食べたり飲んだり、買ったり売ったり、植えたり建てたりしていた」とあったように、御言葉を信じないで、目の前の生活だけを見つめ、逃げようとしなかったのです。

ノアの時代も、ロトの時代も、同じです。滅びの警告がありました。逃れる道が開かれて

いました。しかし、彼らはそれを無視し、神さまの裁きがあること、終わりが来ることを、まったく考えないで、目の前の自分の生活のことしか考えなかったのです。命への招きを無視し、真剣に受けとめなかったのです。

人の子が現れるとき、世の終わりの日にも、人々がイエスさまの十字架を見つめないなら、神のご支配を見つめずに歩むなら、同じことが起こる。そう忠告されています。

今や、わたしたちは既に聞いているのです。人の子の日が来るということ。救い主イエスさまが再び来られるということ。神の国の完成のときがくるということ。終わりの日、神さまの裁きの日が来るということ。そして、命への招きが告げられています。神さまに立ち帰るように。神さまを見つめて生きるように。イエスさまの救いを受け取るように。

わたしたちは今この時、御言葉を聞き、信じ、受け入れ、備えをするようにと促されているのです。

#### <ロトの妻>

そして、人の子の日が来るための備えをする生き方とは、一体どういうものか。それが、その次の31～33節に示されているのです。ここには、先程のロトの物語を受けて、ロトの妻が登場しています。

ロトの妻は、ロトとまだ嫁いでいない二人の娘と共に、御言葉に従ってソドムの町から逃げました。その時、神さまは「命がけて逃れよ。後ろを振り返ってはいけない。…さもないと滅びる」とお命じになったのです。ところが、ロトの妻は途中で後ろを振り向いてしまい、塩の柱になってしまうのです。

なぜロトの妻は、後ろを振り向いたのか。それは、これまでの自分の生活、営み、そして言うことを聞き入れなかった娘や婿たちに、後ろ髪を引かれたからでしょう。これまでの自分の生活。自分の命を支えてきたもの。自分の喜びや楽しみ。それらが、すべて失われ、滅びてしまうのです。それに未練や執着があった。失うことが惜しまれた。その思いは、わたしたちも想像できるのではないのでしょうか。

振り返って見つめようとした、滅びゆくそれらは、彼女にとって、それまで自分の命を生かし、自分の生活を支えていると思っていた、大切なものだったのでしょうか。

しかし、33節にあるように、自分の命を生かそうと努める者は、それを失うのです。自分の命、自分の生活を、自分が手にしているものに頼っているならば、それは自分の命を自分で生かそうと努めていることであり、それは最終的に、本当に命を生かすことは出来ないのです。

ロトの妻が後ろ髪引かれたものは、どれも今、彼女の命を救うことは出来ません。滅びから逃れている今、それらに未練を持っている場合ではないのです。なりふり構わず、救いを求めて、命を求めて、ただ前だけを向いて走らなければならない時なのです。命を支えるのは、ただ神さまの御言葉のみ。命を救って下さるのは、ただ神さまのみなのです。

そして、それが 31 節に語られていることです。「その日には」、つまり、人の子が現れる日には、「屋上にいる者は、家の中に家財道具があっても、それを取り出そうとして下に降りてはならない。同じように、畑にいる者も帰ってはならない。」

大切なものを取りに行っている場合ではないのです。自分の生活の支えと思っているものに、しがみついている場合ではないのです。

いざと言う時に、終わりの日が来た時に、わたしたちの心が、真っ先にどこに向かって行くか。どこに命を求めていくか。それは、わたしたちが日々の生活の中で、どこに本当に命の支えを置いているか。どこに一番寄り頼んでいるか、ということが、明らかにされるときなのです。

#### <二人の違い>

そして、34 節には、そのことが示されています。「言っておくが、その夜一つの寝室に二人の男が寝ていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。二人の女が一緒に臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。」

この二人は、日常生活は、一見まったく同じように過ごしています。二人の男は、寝るところも同じです。二人の女は、している仕事も同じです。

しかし、人の子が現れるとき。イエスさまが再び来られたときに、その人が神さまとのどのような関係に歩んできたかが、はっきりと現れるのです。

一人は連れて行かれる、とあります。この人は、神の国を待ち望み、神のご支配を信じて、日々の命を神さまに寄り頼んで歩んできた人です。そのような人は、イエスさまが来られたなら、待っていましたとばかり、喜んでお迎えすることでしょう。そして、イエスさまが神の国の食卓に座らせて下さるでしょう。

しかし、一人は残される。ノアやロトの時代の人々のように、いつか必ずイエスさまが来ることを知らされていながら、それを無視し、目の前の生活にのみ目を注ぎ、備えが出来ていなかった。そのような人は、イエスさまが来られた時に、お迎えすることが出来ない。主人が帰ってきたのに、眠りこけていた僕になってしまうのです。

わたしたちもまた、一人一人が日々、神さまに対して、どのように歩んでいるか。イエスさまとの関係をどのように生きているか、ということが問われます。

神のご支配を信じ、イエスさまが再び来られる日を信じ、滅びを背に振り返らず、ひたすら前を向いて、救いの完成の日を求めて、イエスさまに目を向けて歩んでいるか。

あるいは、自分の最も大切なものが、自分の持ち物、自分の生活にこそあって、救いへの招きを無視し、イエスさまの十字架を忘れ、自分の命を自分で支えようとしていないか。

イエスさまはここで、わたしたちが、共にいてくださるイエスさまにこそ、生活の中心をおき、人生の支えをおき、命の拠り所とすること。そして、いつイエスさまが来られても、喜んで、目を覚まして、迎えることができるように、イエスさまを見つめて今の時を歩いていくことを望んでおられるのです。

<それはどこで>

さて、これらのことを聞いた弟子たちが、最後にイエスさまに問いました。「主よ、それはどこで起こるのですか」。イエスさまは、これに対して「死体のある所には、はげ鷹も集まるものだ」とお答えになりました。

ちょっと何を言ってるか分からない…と思われるかも知れませんが、この「死体のある所には、はげ鷹も集まるものだ」というのは、「ある条件がそろえば、必然的な結果が起こる」、という、当時のことわざのようなものらしいです。死体がある、という条件があれば、そこにはげ鷹が集まるのは、当然の結果だ、ということです。

さて、ここでは「人の子の日」が来ること、つまり「神の国の完成」について、「それはどこで起こるのですか」という問いに、この答えが返ってきました。

それはつまり、既にイエスさまにあって実現している神の国を見つめて歩む者のところには、必然的に、必ず、神の国の完成はなる。イエスさまに従う者のところに、必ずイエスさまが神のご支配の完成を実現して下さる、ということでしょう。

イエスさまの十字架と復活の御業による神のご支配を信じ、この世にあって、その恵みのご支配に生かされている者。依り頼んで生きる者。そのような者たちの上には、死体にはげ鷹が集まるのが当然であるほど確かに、必ず、神の国は完成に至る。必ず、イエスさまは御自分を信じる者たちのところに来て下さる。そのような、確かな約束として受け取って良いのではないのでしょうか。

ですからわたしたちは、イエスさまの十字架を見つめて、既にイエスさまが実現し始めて下さった神のご支配を見つめて、そこにこそ依り頼んで、日々の命を生きていくようにと励まされているのです。

日常生活の営みは、他の人と変わらないかも知れないし、いつもの毎日、いつもの生活かも知れませんが、でも、神の国を告げ知らされているわたしたちは、その中で、イエスさまの十字架を見つめて生きるのです。この日々を生きる命の只中に、わたしの罪を、苦しみを、絶望を、死を、すべて担って下さったイエスさまがおられ、この方の大きな恵みの中に生かされている。そのことを、はっきりと見つめて歩むのです。

33節にはこうありました。「自分の命を生かそうと努める者は、それを失い、それを失う者は、かえって保つのである。」

自分の命を、自分で生かそうとしなくて良いのです。そんなことは出来ないのです。わたしたちの命は、イエスさまにこそあると信じ、イエスさまにのみあると信じ、自分の持ち物も、執着も、思いも手放して、ただイエスさまを見つめて歩む。そこにしか、命を保つ道はありません。

しかし、まさにそこにこそ、まことの命があり、復活の確かな約束があり、神の国の希望があるのです。そこにこそ、苦しみや、悲しみに覆われているような現実の世にあっても、

共にいてくださるイエスさまから、平安を与えられ、慰めを与えられ、生かされている命を、感謝をもって精一杯歩む道が備えられているのです。

わたしたちは、この、「命を保つ」歩み。それは、ただこの世の命が長らえることではなくて。滅びから救われ、新しくされ、永遠の命に生かされ、復活の日を待ち望む。そんな喜びに満ちた「神の国」の歩みへと、招かれているのです。

### 【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちが、イエスさまが実現して下さった神のご支配の中に、日々生かされていることを覚えて、イエスさまを見つめて、イエスさまに寄り頼んで、歩んでいくことができますように。

日々の色々なことに心を捕らわれ、精一杯になり、自分の命をまことに生かしているものが何であるかを、すぐに見失ってしまうわたしたちです。しかしどうか、聖霊の導きによって、イエスさまのご支配の中、御手の中に、捕らえられていることを覚えさせて下さい。

そして、イエスさまが再び来られる日には、感謝と喜びをもって、心からお迎えすることが出来ますように。その日を待ち望みつつ、今日の日もまた、あなたに生かされる一日を、あなたに心に向けて、ひたすら歩むことが出来ますように。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン